# 読者の評価過程，信念形成と感情喚起

虫明磨毅
{musiake@yahoo.co.jp}

## はじめに

私たちが子供のころ一度読んだ文学作品でも大人になって読み返したくなるということがあるのは，年月を経て読むと，また違った楽しみ方ができるからだといわれる．普段の生活している中だけでも，いやなこと楽しいことさまざまな経験を経る．そうしたあと，文学作品を読み直してみると，新たな発見をする．

## 理解過程

ところで，感情や信念が喚起するのは，なにも文学作品を読んだときに限るものではない．人前で恥ずかしい思いをしたり，それは間違っているのではないか，などと言われることは普段の生活の場面でもたびたび遭遇する． とはいえ，推論，感情が知識の仕組みによって明らかになったのは自然言語理解をとおしてであった．おなかがすいたら冷蔵庫を開けるだろう，といった登場人物の意図，目標，計画に関する推論に基づく物語理解に加え，学芸会などで演技が失敗しそうな人がいれば，あの人はうまくいくか心配しているだろう，さぞ不幸であろう，成功すれば，ほっとするであろう，とか，もし目標がほかの人によって邪魔されそうになれば，怒りを感じるであろうし，他人が助けてくれて発表が成功すれば，感謝するであろう，といった登場人物の感情に関する推論に基づく物語理解などである．（Dyer，1983）

## 鑑賞過程

文学作品とよばれるようなテクストの理解の際には，子供の目標を邪魔する，この先生は厳しすぎる，といった評価喚起に加え，願望喚起という理解過程が行われている．往住ら（往住，1991）によると被験者にテレビドラマを見てもらい，映像を一時止めて，「頭に浮かんだことを実況中継のように報告してください」と発語思考課題を課した実験において，開始時は，登場人物や物語の背景についての発話があり，後半において，登場人物の行動に対して，「私は賛成できない，こうすればよかったのに・・」のような発話が観察されるという．このような理解過程から願望へといたるメカニズムを，以下のように記述した．（井口・往住・岩山，1996）

1，登場人物Xの目標，計画を理解
2，読者の，登場人物Xの目標，を自分の問題として捕らえるという目標の継承
3，その登場人物Xの行為，つまり計画または目標に私は賛成できない，といった評価過程
4，その後，私であったら，こうするのに・・という私の目標と計画が喚起する，

こうした過程は，文学作品の読み返しなどの要因となっているのであろう．新しい発見があるということのひとつの要因に，別の感動が味わえるということがあるがそれは，Xに対する自分の評価が過去の時点と現在では異なるから，当然異なる目標，異なる計画，つまり異なる願望が喚起されるからであろう．もちろん，読者が大人になるにつれて親子の間，職場での人間関係であるとかの経験をへて，対人感情が理解できるようになるため，目標と計画を結び付けている因果が人格特性によって異なること，といった異なる因果関係の存在を知ったり，読者が因果推論の改変を迫られるような経験をしたため．子供のころの推論とは別の推論を組み立てるようになったから，といった感情推論の部分が要因である場合もあるであろう．

信念と感情のメカニズムは，その他の美的な鑑賞にも含まれるのであろう．私たちが山，川，をみるときはその刺激から受動的に喚起される情動や気分だけにとどまらず，そういった風物に関する知識と同時に，山なり観光名物なり，芸術作品なりに関するあらかじめ仕入れていた評価を十分に駆使してみているのであろう．私たちの芸術作品，美術作品の鑑賞もこうした信念と感情の混合過程であるかもしれない．

## 仮説

信念形成が鑑賞過程・文学テキストの理解の一つの要素であるとの認識から，文学作品を理解する際の読者の感情と信念が喚起する様子を観察する．とくに①評価過程，②感情喚起③信念形成とに注目して観察する．①の読者の評価過程は感情とどのような関係であるか，調べる．

## 参考文献

Dyer, M.G., In-depth understanding.(1983), MIT Press.
井口時男・往住彰文・岩山真, 文学を科学する. (1996), 朝倉書店.
往住彰文, 映像の言語と認知の言語:映画の語り方と認知科学. (1991)言語, 21(9), pp.50-57.